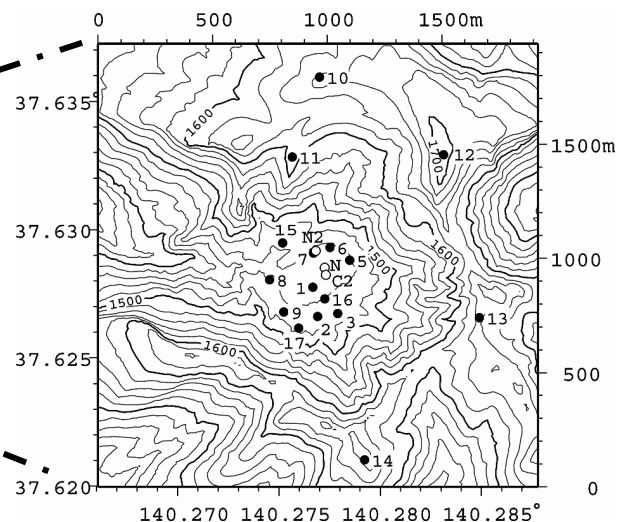
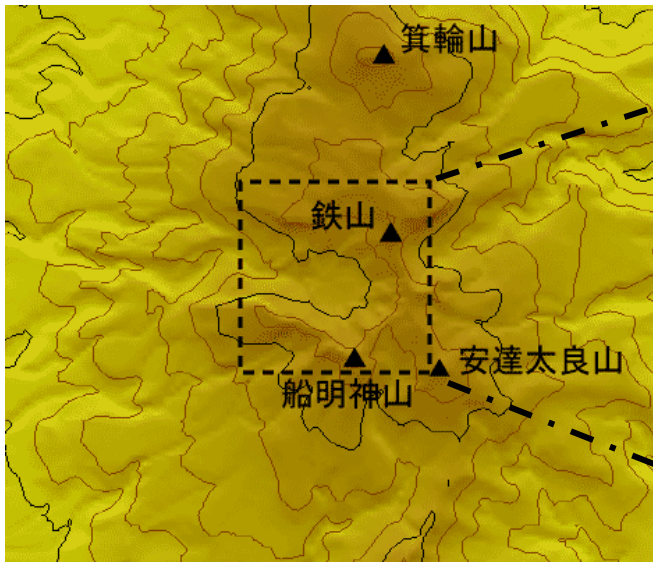


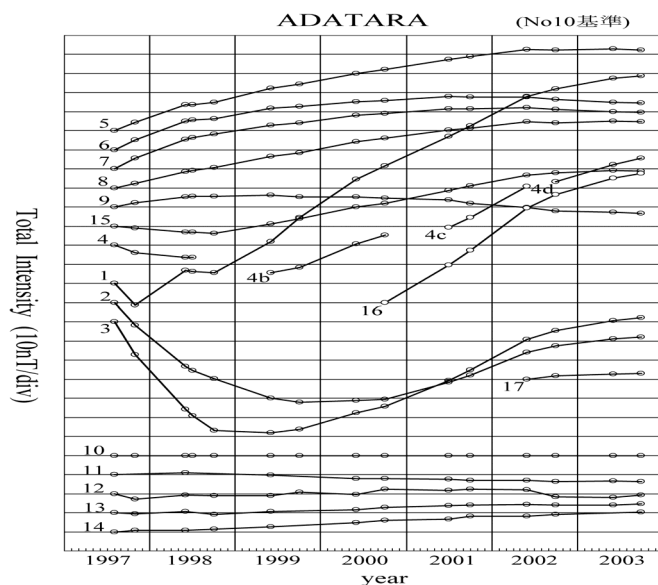
## 防災メモ

### 全磁力繰り返し観測

火山監視における全磁力観測は、火山周辺の磁場の変動を捉えることにより、火山体内部の高温領域と、その動きを把握することを目的として実施します。2003年3月の火山監視・情報センターの設立に際し、地磁気全磁力繰り返し観測がその観測項目の一つに採用され、仙台火山監視・情報センターでは、本年（2003年）10月に安達太良山で地磁気観測所と合同で全磁力繰り返し観測を実施しました。



安達太良山の地磁気全磁力繰り返し観測点(1-17)と連続観測点 (C2,N,N2)。※提供：地磁気観測所



安達太良山の繰り返し観測の結果（観測点 10 を基準とした各観測点の全磁力変化）。※提供：地磁気観測所

安達太良山における地磁気全磁力観測の結果は、1997年から1999年頃は消磁傾向（地下での温度上昇）を示していましたが、2000年以降は帯磁傾向（地下での温度下降）を示していますが、最近はその傾向は鈍化しています。

### 火山体での物質の消磁・帯磁

物質（磁性体）の磁性は一般に温度の増加に伴って減少し、キュリー点と呼ばれるある温度を超えると失われます（消磁）。この一旦磁性を失った物質が冷却されてキュリー点以下の温度になると、今度はその時の磁場の方向に沿って、丁度その磁場を記録する（打ち消す）方向に再び磁気を帯びようになります（帯磁）。

火山の溶岩には磁性体が含まれているので、マグマの貫入等により活発化し、その山体内の一部でキュリー点以上の高温になるとその部分の磁性が失われ、火山周辺の磁場が変化します（消磁）。一方、火山活動が収まると山体内で冷却が始まり、これがその部分の磁気の獲得として観測されることとなります（帯磁）。